

論文の内容の要旨

論文題目 明治日本と台湾像の形成
——~~明治七年~~1874年「台湾事件」の波紋
氏名 陳 萱

一八九四年に始まった日清戦争の勝利によって、日本は最初の植民地、台湾を領有することになった。それ以前にも、豊臣秀吉や徳川家康の時代に、台湾占領の計画があったとされているが、いずれも実行には至らなかった。しかしこの台湾領有は、日清戦争に至ってはじめて具体化したわけではない。その約二十年前の、一八七四年、明治維新を経て近代国家へと成長しつつあった日本が発動した、最初の国際戦争、台湾出兵の際に、台湾を植民地化する意図は萌芽した。この出兵を含む、一八七一年から一八七四年にかけての、台湾をめぐる事件は、日本が台湾に注目し、後に植民地化することになる、起点として捉えることができる。それまで台湾について多くの知識を持たなかった日本政府、及び国民は、この事件についての公式文書、記録、政府関係者の報告書、新聞報道、これに取材した実録作品を通して、台湾を認識し、台湾観を形成したのである。

一八七一年十二月、琉球の宮古島の船が遭難、台湾南部東海岸に漂着し、乗組員六十六人のうち五十四名が、牡丹社、高士滑社の先住民に殺害された。これが事件の発端となった。当初はさほど注目されなかったこの遭難事件に、琉球を実質的に管轄していた鹿児島県の旧士族が着目し、やがて台湾出兵を唱えるようになる。次いで、お雇い外国人の献策があり、さらに清国との事件をめぐる交渉において、先住民は「化外ノ民」であるとの言質を獲得したことで、政府関係者は台湾出兵、領有の意図を抱くようになった。その後も、琉球の帰属との関連、旧士族の政府に対する不満、政府内部の外征派と内治派の対立など、様々な要素が相俟って、出兵が決定、実行された。実際に台湾で日本軍による牡丹人討伐

が行なわれてから、ようやく事態の重大さに気付いた清国は、日本政府に厳重な抗議をし、長い交渉が始まる。当初は結論が出なかったが、結局駐清英国公使ウェードが調停に乗り出したことで、日清両国の間に条約が締結され、事件は終結した。

これまでの研究は、事件の経過と大きく重なる、琉球処分との関わりに重点を置いて、相互の影響を論じたり、国際関係の観点から日清両国の交渉を検討したものが、大多数を占める。また事件を、政府に対し不満を持つ旧士族層の、反政府運動のはげ口として捉え、もっぱら国内の政治情勢との関係から分析しているのも、これまでの研究の大きな傾向の一つである。さらに、明治政府の最初の海外出兵であることから、国家主義の起点と捉えたり、事件を通して確立された明治期の軍事体制を論じたものもある。残念ながら、これらおびただしい研究では、事件を通して生じた、台湾についての言説、またそこに表現された台湾観への言及は、ほとんど見当たらない。この論文では、先行研究をふまえながら、これまで重視されなかった、事件における日本の台湾観の形成や、その変化を論じる。

論文の構成は、扱う資料の性質によって、次の四部に分かれる。まず第一部では、政府が布告した告諭、関係者に下した命令、政府関係者の提出した公式の意見書、建言書、及び関係者の間で交換された書簡など、政府関係者によって作成された公式文書を資料として、事件の経緯を紹介する。まず、琉球人の遭難に始まり、鹿児島県士族によって出兵が主張され、政府関係者が事件を認識していった経過について述べてから、外務卿副島種臣を中心とする外征派が、積極的に出兵を推進し、いったんは実行が決定されたものの、内治派との対立ののち副島を含む外征派が下野したことで、出兵が立ち消えた経過を描く。しかし、政府関係者の間では、国内の不安定な政情のはげ口として、出兵が再び議論されるようになり、列強諸国の反対を押し切って、大久保利通、大隈重信、及び西郷従道の三人が、出兵を実行した経過について記す。そして、出兵に対する清国の厳重な抗議を受けて、特命全権辦理大久保利通が清国に渡り、清国総理衙門の諸官員と交渉、締約した経過について記す。

次に第二部では、政府・軍関係者によって作成された公式文書、記録を中心に、そこに描かれた台湾をめぐる表現を分析して、政府関係者が抱くようになった台湾観、事件の捉え方を解明する。まず第一章では、出兵が実行される前に、外務省に提出された文書を中心にして、出兵の根拠となった、あるいは事件の進展を方向付けた文書の特徴を明らかにする。第二章では、従軍関係者の書いた資料を中心に、その中の台湾をめぐる表現や、現地での体験を分析し、政府の事件に関する対応、台湾観の確立を明らかにする。第三章で

は、事件終了後に政府が作成した事件の記録を取り上げ、その事件の捉え方、及び台湾観を解明する。

つづいて第三部では、新聞メディアの表現した台湾事件に注目する。事件について、つねに事後的、かつ簡略に公表した政府に代わって、新聞メディアは従軍記者の派遣、外字新聞の翻訳を通して、国民に事件の進行、及び台湾についての情報を提供した。第三部では、三つの方向から、新聞に描かれた事件、及び台湾についての表現を分析し、後に日本人の持つことになる台湾観の起源を探る。まず第一章では、当時発行されていた八種の新聞を取り上げ、事件に関する新聞メディアの言論を検証する。第二章では、『東京日日新聞』の従軍記者として台湾に赴いた、岸田吟香の連載に描かれた台湾表現に注目する。第三章では、事件に際して出版された、西洋人が書いた台湾関係の書物の翻訳物を取り上げ、原文と様々な省略、誤訳を含む訳文と比較しつつ、翻訳に描かれた台湾イメージを分析する。

最後に、第四部では、台湾事件に関する新聞報道に依拠して、一八七四年に作成、編纂された、様々な実録作品を取り上げる。まず第一章では、新聞の報道に基づいて書かれた各作品を紹介し、新聞報道との関係だけではなく、各作品間のつながりも明確にしてから、新聞ではほとんど触れられなかったものの、各作品では共通して描かれた、鄭成功をめぐる表現に注目し、台湾事件をめぐる言説における鄭成功像の変化をたどる。第二章では、各新聞における、文明開化した台湾西部、野蛮で未開な東部という、分割された台湾観の形成を追究し、また各作品に継承された、この両分された台湾というイメージの持つ意味を明らかにする。第三章では、牡丹社の討伐に関する描写を通して、野蛮な先住民観の成立、及び日本における国威発揚意識の発生を確認し、新聞報道で形成され始めた国威発揚意識の、先住民観・台湾観に与えた影響と変化を論じる。また、先住民教化のもっとも典型的な事例として、東京へ連れてこられた爾乃少女の表現に注目する。この先住民少女の表現を通じて、事件中、日本人の先住民観の変化を捉え、さらに、それらの表現を通して逆照射される、日本人の新しい自己認識を分析する。

このように、様々な文献資料から、この事件を通して形成された台湾観、及び先住民イメージは、未開な土地、及び野蛮な人種という、一貫して変らない方向を有しながらも、その表現の中心が、次第に変化してきたことを確認する。まず、万国公法という西洋諸国で通用していた基準に基づいて、「未開ノ地」という台湾観が提示された。これをきっかけに、開墾、文明化されていない、先占取得の可能な土地という台湾イメージが、政府関係者の間で芽生えてきた。このような台湾イメージの形成、定着とともに、実際に台湾を訪

れた軍関係者や従軍記者によって、暑熱の気候で、疾病の起きやすい土地として描かれることで、「瘴癘の地」というイメージが形作られはじめた。同時に、このイメージと一見矛盾する、物産が豊かで、開拓・移民に適した土地として、台湾は観察され、描かれるようになっていく。さらに、事件発生の早い段階で、西洋諸国の事件に対する強い関心に気付いた日本は、台湾を国際社会から注目されている土地として認識しはじめた。この認識に基づき、国威を海外へと発揚するのにふさわしい場所として、また、国土の拡張に不可欠の場所として、台湾をより具体的に思い描きはじめた。

先住民についての見方も、当初は討伐を正当化するために、野蛮な未開人というイメージを前面に出していた。しかし、討伐が成功し、台湾領有の可能性が強まるにつれて、野蛮ではありながらも、教化が可能で、日本化が期待される人種として描かれるようになる。つまり、未開ではあるが、現地に滞在する日本人を慕う、日本文化の習得が可能な人種として描かれるようになる。このような台湾観、先住民イメージは、いずれも、日本の期待する台湾観が大きく投影されたものである。

このように、台湾事件を通して形成された、日本人の台湾観、及び先住民イメージの原点である、「瘴癘の地」でありながらも、「無主ノ地」で、植民地化に値する土地、及び、野蛮で未開な人種でありながらも、統治、教化が可能な種族、という見方は、台湾領有後も長く残存し、植民地政策に大きな影響を与えた。また、台湾事件をめぐる様々な言論は、台湾を表現することで、台湾観を形成したのみならず、日本と台湾の関係、さらには国際社会における日本の位置をも浮彫りにしたことを、指摘しておきたい。その自己認識を通して、いっそう近代国家の建設へと邁進することになったのも、日本が台湾事件を通して得た大きな成果の一つである。これについては、残念ながら本論文では多く言及できなかった。今後の研究で展開したい、大きなテーマの一つである。

また本論文では、台湾事件の研究に関して、きわめて重要な要素である、西洋人の言論、及び清国の記録を十分に取り上げることができなかった。今後の展望として、西洋人の事件をめぐる言論に注目し、そこに描かれた台湾、事件についての見方、及びその見方が日本に与えた影響を明らかにしたいという希望、また、清国の事件に関する記録を取り上げ、日本に与えた影響を含めて、日本の言論との相似、相違を明確にして、それぞれの台湾観を検証したいという希望を、記しておきたい。